1933年 東洋オーチス蒲田工場設立（現在 仲六郷１－６）

東洋オーチス・エレベーター

栗原 洋三・岡 茂光

はじめに

二〇一二年四月の「蒲田モダン月例研究会」で岡茂光氏の発表の中で強く印象に残ったことは東洋オーチスエレベーター会社が東海道沿線脇に設置したネオンサインのことでした。そのネオンサインは高さが一・八メートル、横幅が四八メートルと当時（一九三三年）東海道沿線では最も大きなもので、列車の乗客はネオンの輝きに目を奪われたとありました。多摩川を過ぎて終着の東京駅が間近と乗客が感じた時に目に入ってくるのが煌びやかで近代的なネオンサイン、あたかも「蒲田モダン」の象徴の如き存在だったのではないかと感じました。

この話は、同時に私の幼いころの在りし日を思い起こさせてくれました。子供の頃、家族旅行の帰途、車が多摩川大橋にかかる時に目に入る桂川製作所のネオンは、ああもうすぐ、家だなと、なんとなくホッとさせてくれたことを思い出しました。その昔、東海道線の乗客も東洋オーチスのネオンが見えてきて、ああ、東京に帰ってきた、我が家ももうすぐだと思っていたことでしょう。そうです、まさに蒲田の地は大都会東京の西の玄関だったのですね。

さて、主題の東洋オーチスは「蒲田モダン」を築き上げたメンバーの中で唯一の外国資本が入った日米合弁の会社であるということを先ず紹介させてもらいます。エレベーターはご賢察の通り外国（アメリカ）で発明された文明の利器で、この誕生が人間の生活様式を一変させました。そしてエレベーターを誕生させた人こそが東洋オーチスにとっては本家と言えるアメリカ・オーチスの創業者エリシャ・オーチス氏なのです。

オーチス氏は一八五二年、エレベーターの最大の欠点である墜落を完全に防止する装置を発明し翌年のニューヨーク万国博覧会に出品し自らデモンストレーションを行いました。イラストにあるように自らが吊るされた台に乗りハサミで命綱を切りました。満場が悲鳴で包まれる中、墜落すると思われた台は何事もなく空中に留まっていました。

「エレベーターは安全な乗り物！」。以降、アメリカで次々と高層建築物が現れエレベーターは人類の生活様式の改善に大きな貢献を果たしていくようになったのです。オーチスのエレベーターはアメリカだけにとどまらず一

八八七年にはパリのエッフェル塔に設置されました。一九〇〇年には「自由の女神」像、一九三一年にはニューヨークのエンパイアステートビル一九四八年国連本部ビル等々オーチスのエレベーターは世界を席巻していきました。

さて、ここからは日本のエレベーター事情とオーチスの関係、そして何故、蒲田にエレベーターの生産工場として「東洋オーチス」が誕生したのかについてお話をしたいと思います。

日本に最初のエレベーターが登場したのは一八九六年（明治二九）、日銀本店であり製品はアメリカから輸入したオーチス製のものでした。オーチス製輸入エレベーターは一九〇一年、大阪日本生命本社、一九一一年日本橋白木屋デパート、一九一二年、三井銀行本店、一九二四年、銀座松屋デパートと次々に設置され、エレベーターのみならずオーチス製エスカレーターが一九一二年に日本橋の三越に日本初として誕生しました。

では、この間、日本国産のエレベーターはどのような状況だったのでしょうか？　日本に初めて国産エレベーターが登場するのは一九一三年東松（後に日立に吸収合併）と言う名前の会社が貨物用として開発したのが最初でした。その後、一九一五年に同じ東松社が開発した初の乗用エレベーターが大阪の丸紅呉服店に設置されました。しかし、当時の日本製エレベーターは安全性の保証が不十分とされアメリカ製との技術格差が全く縮まらぬなか、輸入性のエレベーターが続々と日本に入ってきたのです。

日本政府はこの状況を憂慮し、国産エレベーターの保護を目的として輸入関税の大幅値上げを決定しました。この決定を受けたオーチスは日本を含むアジアを重要なマーケットとして捉え、日本を技術力、労働生産性から最適の地として三井物産との合弁で工場設立に踏み切り一九三三年蒲田に東洋一の量産体制を誇る「東洋オーチス」を設立したのです。設立場所は現在の仲六郷、土地面積は四三〇〇坪、保有者は「蒲田モダン」の先駆者と言える黒澤タイプライター創業者の黒澤貞次郎氏でした。

オーチスは何故工場建設地として蒲田を選んだのでしょうか？　何故、工場用地を黒澤貞次郎氏から購入することが出来たのでしょうか？　蒲田の利点、そして東洋オーチスと黒澤貞次郎氏の接点はどこにあったのでしょうか？

蒲田という名前の由来のひとつが“一面の泥田に蒲が生い茂った場所”であり、土壌と水質は劣悪との世評が広

まっており、当時の土地の値段は安価にもかかわらず人家はまばらでした。それが、一九〇四年にＪＲ蒲田駅が誕生、一九一四年には京浜東北線が運行を開始し、都心からきわめて至便な場所となったことが工場建設地として蒲田を選んだ最大の理由と言えると思います。

つぎに、どうして黒澤貞次郎氏が蒲田に土地を保有していることを知り得たのか？　これについては憶測の域を出ないのですが蒲田マン、のみならず銀座マンとして顔の広さを誇った黒澤貞次郎さんならでは知己の繋がりだと思います。黒澤タイプライター銀座本店に毎日通っていた黒沢氏は常日頃昼食を銀座「凧月堂」（ふうげつどう）の奥まった一室で友人と共にしていました。人呼んで「貴族院」と言われる一室には当時の日本を代表する経財界人、政治家、学者、文化人が集まっていました。恐らく、その中には三井物産の幹部も出席していたことが容易に推察できるので、この席で蒲田の土地が話題となったものと思われます。

一九三三年に完成した「東洋オーチス」蒲田工場の一端を紹介しましょう。設計を手掛けたのはライトと共に帝国ホテル設計に携わったアントニン・レイモンド。工場は全面ガラス張りで明るく、設備もすべてが洋式、日本に数々のモダニズム建築を遺したレイモンドならではの建物として世間の話題をさらいました。同年、当時の世界の最先端技術を搭載した記念すべ蒲田工場第一号機が静岡の日赤病院に納入されました。

東洋オーチスは合弁会社という宿命を背負い、戦前から戦後にかけ、軍部による統制圧力、空襲被害など、幾多の困難を乗り越えて日本の近代化と共に前進していきました。そして日本が世界の注目を浴びた東京オリンピックの年、一九六四年に更なる発展を求め、工場を千葉に移転し蒲田としての役目を終えました。その後一九七三年、社名を「日本オーチス」と改称し今も日本を代表するエレベーター生産企業としての活躍を続けています。

蒲田工場の跡地は当然ながら当時と様相は一変しているなかで「日本オーチス」が建立した「エレベーター誕生の碑」だけが「蒲田モダン」のメンバーとしての活動の痕跡をとどめています。（参考：碑の所在地　仲六郷一丁目六―九　マンション「ルネ蒲田　ガーデンステイツ」南側の緑地付近の歩道脇）

あとがき

それは二〇一二年四月、八重桜が咲き誇る京都でのこと。未だ現役で稼働しているオーチスエレベーターを見に、京都三条大橋の袂の中華料理店（東華菜館）に旧友の岡茂光

さんと訪問しました。日本で数多くの建造物を手掛けた著名なアメリカ人デザイナーであるウイリアム・ヴォーリスによる歴史を感じされる建物に相応しいオーチス製エレベーターは一九二四年にアメリカから輸入されたもので、現存する日本最古のものとなっています。 蛇腹式の開閉ドア、威厳とした佇まいの昇降かごに、子供の頃乗った三越、高島屋！のエレベーターを思い出し、とても懐かしく感じました。あの頃と同様、エレベーター専門の女性スタッフの導きで音もなく滑らかにエレベーターは上昇していきました。私より二〇歳も年上のエレベーター、九〇年もの長きにわたり安全に動かしているオーチス社の技術とサービスに感動致しました。アメリカで生まれた先進技術が日本の土地で日本人技術によって進化を遂げた「東洋オーチスエレベーター」は「蒲田モダン」の精神を培い発展させながら現代に受け継がれているのです。

以上

1926 年設置　今も稼働中のオーチスエレベーター

京都三条大橋　東華飯店(2012-4)